高知県立文学館ニュース

藤並の森

Vol.6

高知県立文学館

●「棚田の秋（高知県越知町）」（写真提供／杉野節子氏）

リレー随筆⑥　志　和――嶋岡　晨

諏訪将人『志和物語』（平八）を愛蔵している。――十四のころだが、わたしは諏訪奨『郷土志和史伝』（昭十三）の写本を作ったことがある。将人は奨の子息で、因縁を覚える。

奨は戦後、東邦レーヨンの専務をつとめた実業家だが、郷土史に造詣が深かった。その父の遺志を継いで、将人は、郷土史誌「志和」を刊行していた。

京都在住の将人氏から「志和」を送ってもらったのは、昭和五十三年ごろ。当方、歴史ものを手がけていて、それがお目にとまったらしい。表紙にむかしの郷土の写真や地図が使われていて、懐かしかった。

「志和」発表の論文をもとに、亡父の集めえなかった資料をぞんぶんに用い、改めて詳細な〈志和史伝〉をまとめたのが、『志和物語』である。

昭和七年三月、高知県高岡郡東又村（現・窪川町）志和にわたしは生まれた。両親の故郷だが、父方ははやく家屋敷を失っていたから、郷分（ごうぶん）の母方の家を頼りにするしかない。

小学生のころから、わたしはよく母方の下村家で世話になった。夏冬の休みのおりだけではない。小学二年生の一年間、六年生の前半期、そして商工学校二年時の疎開休学の一年間、下村家で過ごしている。まだ感性の鈍麻しない日々、わたしは志和から多くのものを得た。

夏はよく築港へ泳ぎに行った。潜って貝をとる。磯釣りもする。木の枝に腰かけて、じかに山桃や枇杷を頬ばった。野兎や鵯の味も覚えた。肥桶（こえたご）や炭の俵をかつぐ辛さも知ったが、はるかに多くの楽しい記憶がわたしには詰まっている。

後年、田岡典夫『武辺土佐物語』の「唐人妻」を知り、うれしかった。子どものころチャンバラなどして遊んだ天神山（志和城址）も、なじみの海辺の眺めも確り描かれている。

宝永・享保のころの史書『土佐物語』の一章「志和一族誅伐の事」に、「背高く色白く…文学も又暗からず…笛の上手にして…強弓の矢継早、道を踏む事、一日に四十余里を駈け通る」と、志和勘助のことが出ている。志和氏の一代表、この英雄が「唐人妻」の主人公。

文禄の時代、朝鮮ノ役に加わり活躍したが、唐人の娘（応姫＝おこま）を連れ帰り、妻にしたため悲劇がおきる。――そんなふうに田岡典夫は小説化している。しかし、史書に唐人妻の記述はないから、そこは田岡氏のユニークな創作であろう。

志和を舞台とする作品は、他に松谷みよ子「珊瑚城」（『土佐の伝説』）もある。拙作小説は、省略。

ついでながら『仁井田郷談』には、志和氏従臣として嶋岡丹波なる人物の名が出てくる。名前はりっぱだが、わずか四石八斗余支給という哀れな存在だった。わがご先祖さまか。

（詩人）

◆次回企画展によせて◆

平成11年10月9日(土)～11月28日(日)

「没後50年 田中英光展」

～純粋な魂の軌跡～

田中 英光

あなたは驚いたやうに顔をあげて、
ぼくをみた、
眞面目になった、あなたの顔が、
月光に、青白く 輝いてゐた。
それは、童女の貌と、
成熟した女の貌との混淆による
奇妙な魅力でした。

（青春小説の傑作と言われる『オリムポスの果実』）

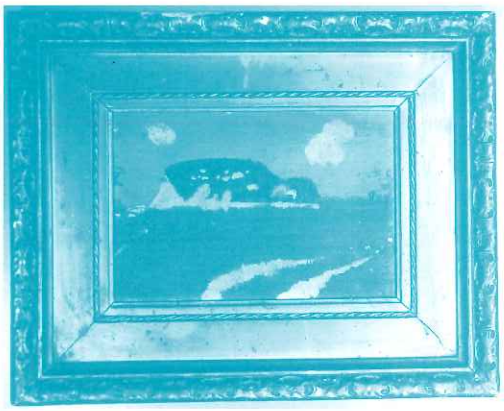
英光は、昭和七年（1932年）第十回ロサンゼルスオリンピック大会にボート部の早大エイト・クルーとして出場しました。八年後、そのときの船上での淡いロマンスを綴ったこの小説は、太宰治の推薦により『文学界』に載り、第七回池谷賞を受賞しました。「ピンセットで活字を一つ一つつまんで喰べてしまいたいほどの作品」との好評を得ています。

田中英光は、大正二年東京・赤坂に高知県出身の父英重、母済の五人目の子どもとして生まれました。当時父英重は、田中光顕伯爵の庇護を受け、文部省史料編纂官を勤めています。また、「鏡川」と号し、「坂本龍馬関係文書」などの優れた著書があります。英重の祖父英生もすぐれた国学漢学者でした。少年時代の英光は、文学青年であった兄英恭の影響も受けながら、文学・政治への関心が育てられていきました。

昭和十二年に召集されますが、文学への志を捨てきれない英光は、戦地を転々としながらも、文学上の唯一の師・太宰治に小説をせっせと送り続けています。

このように英光が、作家として花開こうとしたまさにその時、太平洋戦争が勃発しました。戦後の英光は、侵略戦争に加担したことへの贖罪のためか、日本共産党に入党、献身的に働きましたが、一年後「主義は信じられるが人間は信じられぬ」と絶叫を残し離党します。政治活動に絶望した英光は、極度の自己嫌悪を引きずりながら、酒と女と薬物のデカダンスの世界へと入っていきます。妻子と女との間でどちらも捨てきれず、往ったり来たりの不徳義漢の生活を送りました。

「オリムポスの果実」初版本



「自筆油絵」中学時代

ぼくは自分を死者と信じながらも、
実は、まだ生の世界に「さよなら」を
いいたくない。

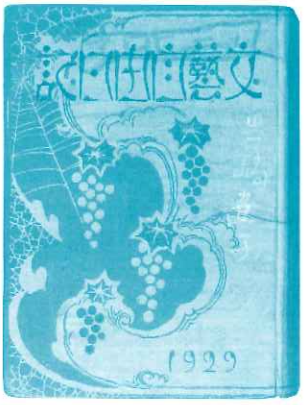
（『さよなら』）

と、生に固執しながらも、行き場を失った英光は、昭和二十四年十一月三日師・太宰治の墓前で、実戦・行動する激しい人生に終止符を打ちます。英光は、このたいへんスキャンダラスな生活の間に、数多くのすぐれた作品を生み出すという離れ業を行っています。

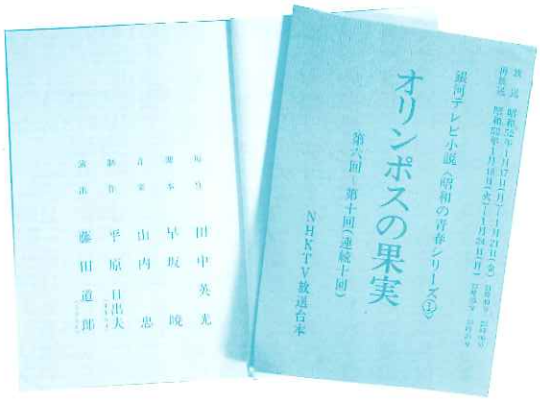
昭和十年同人誌『非望』に発表の『空吹く風』が師・太宰治の目にとまり「君の薄暗い竹藪の中にはひとり、かぐや姫が住んでいる…」と葉書をもらってから死までの十四年間に、英光は驚くばかり多くの作品を残しています。

英光の作品は、無頼派私小説が中心ですが、『怪傑自来也』などの奇伝ものや、古典もの、風俗ものなど多彩な筆才をみせています。

英光の戦争小説は、実戦でかいくぐってきた修羅場だけでなく、『なべ鶴』『姑娘の聖歌』『山西省の桜』などの甘美な題名からもうかがえるように、牧歌的風景・抒情的風物が描かれ読者の心を和ま



青春時代の「日記」



銀河テレビ小説になった「オリンポスの果実」のシナリオ（昭和52年1月10日～1月21日）

せてくれます。また、展示の『鈴の音』書き込みは、軍事化での執筆活動の苦悩を物語ってくれます。

党活動時代の小説、『N機関区』『地下室から』『少女』などは、党側からは反党的暴露小説と批判されましたが、政治運動における組織と人間のあり方を問い直す先駆的作品として、今なお高い評価を受けています。

離党後の英光は、我と我が身を滅ぼしながら、彼の最も優れた多種の作品群を驚くほどの速さで生み出してゆきます。作者の愛欲生活の赤裸々な告白私小説『野狐』、歴史小説『桑名古庵』、少年時代を描いた『少年の信仰』など。けた外れの不徳義漢の英光ですが、行間からは、育ちのいいお坊ちゃん的純情無垢の魂がかいまみられます。

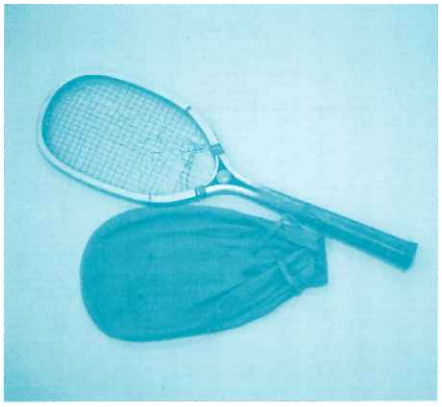
徴兵検査のため、はじめて訪れた故郷土佐の印象をみずみずしく綴った

「鈴の音」修正書き込み本『我は海の子』に所収

太宰治宛書簡「独楽の自序に代えて」昭和11年10月9日

『桜』でも、父のふるさとの、苛酷ともいえる一族の運命を心温かく見つめています。

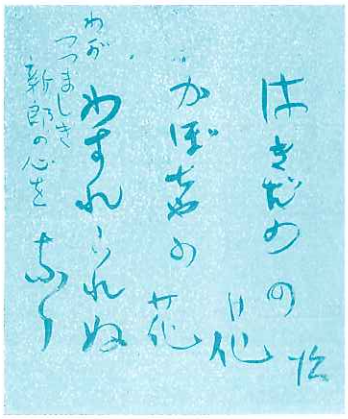
誰もが逃げられなかった戦争という時代に流されながらも、純粋な温かい魂のまま、文学といえども社会と無関係には存在し得ないという信念で真剣に人生にぶつかっていった英光。師・太宰治との交流、故郷土佐への郷愁を交えながら、著書、少年時代の日記や戦地から送った多くの書簡などを展示し、英光三十六年余の純粋な魂の軌跡を回顧します。



中学時代姉たちとテニスを楽しんだ「テニスラケット」

直接、文章に接することができるコーナーや、初公開の日記などの資料をご遺族や多くの方々のご協力のもと展示いたします。皆様のご来館を心からお待ちしております。

（学芸課　嶋崎るり子）



英光の結婚に際し太宰治からの「色紙」

【主な展示資料】

- ■太宰治からの結婚祝い色紙、太宰治宛て英光書簡（「独楽の自序」にかえて）
- ■英光「鈴の音」書き込み本
- ■自筆原稿、自筆書簡
- ■英光遺書（「太宰集」書き込み）等

【関連催し物】

※参加無料、文学館ホールにて

◆映画会

※当日先着100名

◇10月17日（日）14時～
　11月14日（日）10時～

◇「斜陽」（'93松竹）

原作・太宰治（太宰治は、英光が執筆のため離れを借りていた安田屋旅館で交友を暖めながらこの小説を書いた）／監督・河野宏

出演・紺野美沙子、司葉子、根津甚八

◆記念講演会

※要事前申し込み（はがき）定員150名

◇11月3日（水・祝）
　13時30分～16時30分予定

◇講師／島田昭男氏（恵泉女学園大学教授）外

学芸員メモ

「土佐と啄木」－今回の展示の中から－

高知県立文学館外観

啄木の父一禎終焉の地土佐

土佐は、啄木の父石川一禎の終焉の地である。一禎は、晩年の十七年間、啄木の姉トラの夫山本千三郎の元に身を寄せ、千三郎の転勤に伴い、北は北海道、長野、そして四国と全国各地の大半を回り高知で生涯を終えている。明治四十四年九月三日の啄木の日記には、「妹は教会にゆき、妻も母も寝ていた。十時頃土岐君が来て、十二時少し前に帰った。その時父はもういなかった。待っても、待っても帰らなかった。…　眠られない夜であった。体温三十七度八分。」と書かれているように、この日一禎は啄木達の元を去り、当時北海道管理局手宮駅長をしていた山本千三郎の元に身を寄せたのである。この頃の啄木は、妻節子、長女京子、父一禎、母カツ、妹光子と共に生活をしていたが、一家は日に日に困窮。「病苦と貧苦」という窮状に堪えかねた一禎の覚悟の家出であった。

千三郎の履歴書によると「大正十四年一月十九日、本省、神戸鉄道局高知出張所長ヲ命ズ」とあり、高知へはこれ以後転勤してきたと考えられる。そして、昭和二年二月二十日、啄木が誕生したといわれる同じ日、高知市北本町現在のＪＲ高知駅東側にあった官舎において、一禎は七十八歳の生涯を終えている。この間約二年間であった。

生前一禎は、和歌に親しみ、三千八百五十余首を収録した歌稿「みだれ芦」を今日に残している。晩年の一禎について千三郎の孫勝重の妻の妹、稲垣積代氏（元、一絃琴の会会長）が「炬燵にはいっていつも歌を書いていた様子を思い出します」（「高知新聞」ひろば）と記しているように、千三郎の家族に囲まれて、歌を詠む穏やかな日々を送ったようである。それは、高知官舎前で撮った親族写真からも当時の一禎の様子を窺うことが出来る。しかし、残念なことに、現時点において、一禎が当時の土佐を詠んだ歌は見つかっていない。

この官舎跡地には、一九九二年県歌人協会によって標柱が建てられており、この標柱には、「啄木の父、石川一禎終焉の地」と書かれている。

啄木と秋水

啄木の晩年の作品、思想に大きく影響を与えたといわれる大逆事件（幸徳事件）。この事件の首謀者と目され死刑となった幸徳秋水は、土佐の出身である。

幸徳事件とは、明治四十三年五月、長野県の製材工宮下太吉が爆裂弾製造所持に端を発し、幸徳秋水の検挙、全国の無政府主義者、数十名が拘束、ついで刑法第七十三条（大逆罪）の容疑者として、二十六名が起訴、その全員が有罪となり、秋水を含む十二名が、判決後数日の内に死刑執行された事件である。

この事件は、当時朝日新聞社に勤めていた啄木を含め明治末の多くの文学者達に大きな衝撃を与えた。しかし、作品に表明した作家は少ない。平出修『逆徒』『計画』・与謝野寛『誠之助の死』・佐藤春夫『愚者の死』・木下杢太郎『和泉屋染物店』・永井荷風『花火』・森鷗外『沈黙の塔』そして石川啄木　詩稿ノート『呼子と口笛』などに見られるが、その中で最も文学的反映を示したのは、啄木と平出修と言えよう。

今回展示させていただいている「幸徳秋水より弁護士に送れる書」（ノート）を当時弁護団の一員であった平出修から秘密裡に借り、書き写し、啄木の注釈を加えた「A LETTER FROM PRISON-'V' 'NAROD' SERIES」や啄木の写した事件記録『日本無政府主義者隠謀事件経過及び附帯現象』は今日の幸徳事件の真相解明においても貴重な文献となっており、彼の文学者としての熱情は、この事件の衝撃を正確な事件に対する知識の上に立って、次々と造形化させていった。明治四十四年六月十五日から十七日にかけて書かれた「はてしなき議論の後」九篇の詩がそれであり、社会主義詩集として注目されている『呼子と口笛』は、こうした社会的背景の中で生まれたものである。啄木はこの事件を歴史的事件として正面から取り組み、文学者として「何をなすべきか」そして「民衆の中へ」を目標に実践行動に移ろうとしたのであろう。しかし、彼はその志半ばにして、明治四十五年四月この世を去ることとなる。

幸徳秋水より弁護士に送れる書（ノート）
（日本近代文学館所蔵）

「呼子と口笛」詩稿ノート
（日本近代文学館所蔵）

啄木と吉井勇と馬場孤蝶

北海の寒さをかたる啄木の寂しき眉を見るよしもがな

土佐ゆかりの作家吉井勇が啄木を歌った歌である。「私が石川啄木君と最も親しく交わったのは、明治四十一、二年の

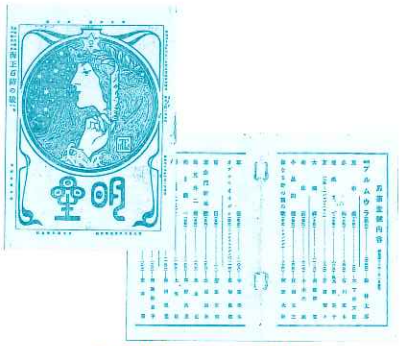
頃、共に「昴」の編集に従つていた時代のことであった。…そこで彼は昂然と歌を軽蔑しながら、これから書こうと思っている小説の梗概なぞを、野心的な口調で語つていた。そしてどちらかの懐に、多少の金がある場合には、誰が誘ふでもなく本郷三丁目の寺の境内にある小さな天麩羅屋に住つて、文学を論じながら酒を飲んだ…」(吉井勇全集七巻　回顧篇　啄木より)このころ、啄木は本郷森川町の蓋平館別荘に下宿しており、勇の住居とは四、五町位しか離れておらず、勇は頻繁に啄木を訪ねていたようである。

それまでも、勇は新詩社の席上などで啄木を見かけているようだが、啄木の日記によると、啄木が勇をはじめて意識したのは、明治四十一年五月二日与謝野寛につれられて参加した、森鷗外宅で開かれていた観潮楼歌会の席上であった。参加者は佐佐木信綱、伊藤左千夫、平野万里、吉井勇、北原白秋、与謝野寛、鷗外、啄木の八人であり、その時の採点は、鷗外十五点、万里十四点、勇、啄木共に十二点であった。そして、その帰り勇と啄木は万里の家に足を延ばし、遅くまで語り合っている。

また、文学活動と社会改良運動にと実践力を見せた高知出身の英文学者馬場孤蝶とは、明治三十五年啄木が上京した年、与謝野鉄幹・晶子夫妻と交流を始めており、啄木との出会いも彼らを介してであった。啄木の短歌「血に染めし歌をわが世のなごりにて　さすらひここに野にさけぶ秋」が明治三十五年十月発行の「明星」にはじめて掲載されたとき、孤蝶はモーパッサンの翻訳「ふながゝり」上を執筆している。また、啄木の明治四十年一月の年賀発送リストには孤蝶の名が見られ、明治四十二年六月六日の日記の中でも「夕方殆ど二週間ぶりにて千駄ヶ谷にまいり、詩人夫妻及馬場孤蝶、生田長江に逢って来」と記している。そして、雑誌「スバル」創刊号では、啄木の小説「赤痢」と孤蝶の論文「オブロモオヰズム」が同時掲載されており、お互い「明星」「スバル」同人としての文学活動を展開している様子が窺われる。

残念ながら、生涯啄木が土佐を訪れることはなかった。しかし、今回の特別展を通して「土佐と啄木」意外な接点に、人と人との出会いの不思議を思う。

(学芸員　津田加須子)



雑誌「明星」明治35年10月
表紙と目次
(日本近代文学館所蔵)

閲覧室から

『貝がらの詩(うた)』

橋詰　緑　著

戦前戦後の郷土研究・民俗研究に大きな足跡を遺された橋詰延寿氏が昭和六十三年六月十九日に亡くなられて、早や十一年。この著は長く苦楽を共にされた夫人の緑さんが、生前延寿氏からよく聞かれていた思い出話を、延寿氏十周忌を機に書きまとめられたもの。

昭和二十七年秋、寺田寅彦文化切手発行を記念しての小宮豊隆氏講演会や遺品展の企画に奔走された日々のこと。昭和三十六年の〝川村源七を野に放ち野に迎える会〟での仲間の友情。「南海の詩人」岡本弥太自筆「白牡丹図」詩額にまつわる話。おうち(センダン)の花への思いと歌と梁山泊仲間たちとの日々。ボートの縁で結ばれた作家浜本浩一家や旧制高知高校校歌作詞者松野仁氏との交友の思い出。土佐方言研究を介しての土井晩翠・八枝夫妻とのご縁などなど…。

単なる個人の思い出を超え、近代土佐の文化側面史としても読み応えのある、そして耳になつかしい好著である。

(一九九九年三月橋詰緑氏発行二八五頁)
※当閲覧室(利用無料)でお読みいただけます。

県内同人誌紹介

川柳木馬

「川柳木馬」は、高知県柳界の改革を目指し、作品の質的向上と、個性の尊重及び川柳理論の確立を目的として昭和五十四年七月に創刊。創立メンバーに海地大破、西川富恵、古谷恭一、北村泰章がいる。

連載中の「昭和二桁生れの作家群像」は好評で、他誌に類を見ない重厚さを誇っている。その集大成として『現代川柳作家群像』の単行本発刊を企画中。

'98年度の業績として、清水かおりが「川柳Z賞大賞」、海地大破が「オール川柳賞準賞」、久保内あつ子が「川柳ふあうすと賞準賞」、山本三香子が「高知県短詩型文学賞佳作」を受賞。

本年度、木馬創立二十周年を迎えるにあたり、「川柳の美学について」「川柳の多重表現について」の柳論を柱として、会員作品の発表に力を注いでいる。現在、記念集の編集作業中。(北村泰章)

発行所／土佐市高岡町犬の場　海地方
川柳木馬ぐるーぷ　季刊誌　三十五頁
五百円

野良時計（安芸市土居）

土佐文学さんぽ 5

萬朝報「発刊の辞」

黒岩 涙香

代價。近年新聞紙の相場次第に騰貴し今や低きも一錢五厘以上なるに及べり。然れども我國今日の社會に於て一錢五厘ハ大金なり。人々日々に欠く可からざる入湯の料より高く。重寶無類なる郵便はがきの價より高し。新聞紙一枚を買ふにハ一度の入湯を廃せざる可からず一度の音信消息を見合せざる可からず。否廃しても猶足らず見合せても猶屈かざるなり。實際に於いて眞逆に入浴を廃せずバ以て新聞紙を買ふ能ハずと云ふ程の人も有るまじけれど算盤珠の上に於てハ入浴を廃する同じ音信消息を見合すに同じ。

天下のスキャンダル新聞「萬朝報」（一八九二年創刊）の創始者、探偵翻案小説の元祖として知られる黒岩涙香（一八六二～一九二〇、安芸市川北生まれ）が、明治、大正期最大の通俗文化の組織的鼓吹者であったことは、意外に知られていない。

すなわち、庶民の娯楽である五目並べ、どどいつ、かるた、たまつき、マンガ、家庭菜園、はたまた「百字文」と称して一般大衆に言文一致体の小品文を奨励したことなど、「萬朝報」の紙面を最大に利用、これ喧伝につとめたのである。しかし、将棋や碁でなく、なぜ五目並べなのか。詩（新体詩）や和歌と同格になぜどどいつを取り上げたのか。ここらあたりを、通俗文化に重要な意味をみる鶴見俊輔は、将棋や碁は完成された一流の文化であって、何でも一番でなければ気の済まなかった涙香の入り込む隙はなかったのだろう、と説明している。しかし、それまで取るに足らぬとされていた軽い遊びへの異常な肩入れの姿勢は、「発刊の辞」にすでに端的に示されていた。時の宰相を震えあがらせた〝まむしの周六〟は、意外なほど、視線が低く、細かい。

まず〈目的〉には「他なし普通一般の多数民人に一目能時勢を知るの便利を得せしめ為のみて」と大目的を述べ、〈代價〉では、既存の新聞の一錢五厘は高いと云い、それを入浴代やハガキ代に比してみせ、〈紙幅〉では、記事長ければ用事の防げとなり、油代も重むと、かなり細かいことを云っている。〈文章〉においては、平易通俗にすることによって番頭、小僧、下女まで読むことが出来、家長のみ読むよりも安上りにつくではないかと、これまた家計簿的細かさだ。

庶民の生起する小さな現場から一ミリも離れまいとするこの周到な気配りからごく自然に、家庭娯楽欄が充実していったとみたい。

幸徳秋水、境枯川、内村鑑三、田岡嶺雲、内藤湖南等、日本思想史上の不朽の人材を擁して論陣を張り、天下国家の〝見識〟を庶民に広めたのみならず、家庭の娯楽文化に熱中した涙香の根底は〝家庭の幸福〟を軸点する人ではなかったか、と思わせるものがある。そうでなければ、最初の妻を離縁した後、理想の女性に深く思いをめぐらせた「小野小町論」（一九〇六）を書く必要はなかったともいえよう。

「萬朝報」の金看板、醜聞暴露、探偵小説も所詮、四畳半的娯楽に蔵い込まれるものではないか。

涙香が、これが一番と推奨するどどいつは、

潮来出島のまこもの中に
　あやめ咲くとは　しおらしや

であったという。固く佇立するまこも（厳しい世間）よりも、しおらしいあやめ（家庭の幸福）に、価値をみたのである。

× ×

涙香の通俗賛美精神は、地元土佐にもしっかりと流れ着いていた。昭和六年、香美郡夜須村（現夜須町）から全国発信された俚謡月刊誌「俚謡作興」（土佐香水社、小松香水）は、昭和二十五年まで続き、創刊号の巻頭言には「俚謡正調の祖初代正調庵黒岩涙香先生の遺された手引書によりて作詩のコツをさぐりませう」とある。

今も活動を続けている百人一首かるた取り競争グループ「高知かるた会」（高知市南はりまや町）の主催者、西内康夫さんは、「涙香さんが残したものを高知の人がやらんとは……」と発奮したのが動機という。

あだばなのようなイデオロギーよりも、庶民の娯楽の方が、息が長いのである。

（フリー編集者　国則三雄志）

見どころ＝●土居廓中武家屋敷●野良時計●内原野●伊尾木洞●安芸市書道美術館

資料受贈報告（平成十一年六月～八月）

敬称略

▼**飛鳥企画**・「女性作家シリーズ5」ほか▼**高岡純子**・「（歌集）河口」▼**土佐山村公民館**・「土佐山人物史」▼**神奈川文学振興会**・「中里恒子文庫日録」▼**高知波発行所**・「（合同句集）波の花」▼**田村八重**・自著「玉すだれ―田村八重歌集―」▼**小笠原真一**・影山聖二「微塵となる人生」▼**アンパンマンミュージアム**・「（7人の漫画家）名句のせかいを描く」ほか▼**北川かおり**・「寺田寅彦全集27巻」▼**乾常美**・「卵塔物語―南国史談22号より抜粋」▼**老人クラブ**・大原富枝「東福門院和子の涙」ほか▼**矢島道弘**・無頼文学会編「無頼の文学23号：特集田中英光没後50年」▼**土佐倶楽部社**・国則三雄志「土佐句テニハの世界」▼**山川禎彦**・自著『あかねの世界』」▼**高知県俳句連盟**・「第28回高知県俳句大会」▼**(株)ぎょうせい四国支社**・大河内昭爾「三鷹文学散歩」▼**姫路文学館**・坂本遼「たんぽぽの詩―坂本遼作品選―」▼**森下時男**・江戸川乱歩書簡　森下雨村宛、海野十三肖像写真▼**岩波書店**・「寺田寅彦全集28巻」ほか▼**吉良町立図書館**・尾崎士郎『今日我存在此処』紺色染め抜き布地ほか▼**中谷宇吉郎雪の科学館**・「天から送られた手紙―写真集　雪の結晶」▼**さいたま文学館**・「永井荷風資料目録」▼**神奈川近代文学館**・「県立神奈川近代文学館収蔵　特別資料リスト1993・1998年度受入」ほか

※このほかたくさんの皆様から寄贈いただきました。厚く御礼申し上げます。

◆◆◆文学館日誌 1999年6月～8月◆◆◆

6月

◆17日 県文化推進協議会会長・永富氏ほか来館。◆19日 田中英光専門講座。◆24日 四国博物館協議会、甲浦長生会ほか来館。◆27日 講演会「寅彦の光景―寺田寅彦の足跡探訪Ⅰ―」開催。講師・永国淳哉氏（日米学院校長）。文学館ホールにて。実際に現地を訪れた講師の写真スライドなどで、寅彦のドイツ留学の足跡を辿る。参加者約二十五名。

6／27 講演会「寅彦の光景」

7月

◆1日 高知カルチャーゾーン連絡協議会主催「高知カルチャーゾーン・スタンプラリー」開始（8／31まで）。当館含め、高知市とその周辺の十一の文化施設を回る夏休み企画のスタンプラリー。◆6日 常設展示ミニ企画「土佐句テニハの世界展」開幕（9／19まで）。常設展示室内にコーナー展示。土佐の庶民の間で流行した変調の狂句・テニハの世界を紹介。監修・国則三雄志氏。◆7日 日本学術会議創立五〇周年・高知新聞創刊九十五周年の「記念フォーラム・特別講演会」開催。6日に自由民権記念館で「自由民権特別講演」が開催されたのを皮切りに、7日に教育フォーラムと、文学、福祉問題の特別講演会が高知市内の三会場で行われる。「文学特別講演会」（当館ほか主催）は、高知城ホールにて開催。石川忠久氏（二松学舎大大学院教授）による「漢詩に見る〝友情〟〝愛情〟」、中西進氏（大阪女子大学長）による「源氏物語の愛」、平岡敏夫氏（筑波大名誉教授）による「啄木・秋水・トルストイ―日露戦争反戦論のゆくえ」の三講演。参加者約二四〇名。◆17日 田中英光専門講座。同日、田宮堅二氏（田宮虎彦次男）来館。

7／7 文学特別講演会
左から石川忠久氏、中西進氏、平岡敏夫氏

7／6～9／19 ミニ企画展「土佐句テニハの世界展」

8月

◆3日 夏季特別展「石川啄木展―貧苦と挫折を超えて―」開幕（9／19まで）。◆6日 私立短大図書館中国・四国連絡協議会来館。◆8日 石川啄木展関連事業「朗読の会」開催。文学館ホールにて。参加者約百名。第一部：講演会「文学作品の朗読法―表現よみとは何か」。講師・渡辺知明氏（日本コトバの会）。第二部：啄木作品「雲は天才である」ほか朗読（日本コトバの会の皆さん）、朗読についての座談会（渡辺知明氏、松本三三男氏、松田光代氏、野中久美子氏）。第三部：樋口一葉「十三夜」、志賀直哉「剃刀」、谷崎潤一郎「春琴抄」の朗読（日本コトバの会の皆さん）。◆13日 第二回児童生徒朗読コンクール第一次選考（高知会場）開催。文学館ホールにて。◆18日 朗読コンクール第一次選考（大方会場）開催。大方あかつき館にて。◆20日 朗読コンクール第一次選考（安芸会場）開催。安芸市中央公民館にて。◆21日 田中英光専門講座。◆24日 嶋岡晨氏来館。◆25日 兵庫県竜野市霞城館の苗村館長来館。

8／13 第2回児童生徒朗読コンクール
第1次審査（高知会場）

8／8 石川啄木展関連事業「朗読の会」

第二回文学カレッジ開講のご案内

昨年好評であった文学カレッジを今年も開講致します。文学館活動の一環として、各専門分野でご活躍の講師に毎回登壇頂き、月1回ずつ全5回（11月～3月）で開催。文学への幅広い興味を深めていただければと存じます。受講無料。

〈日　時〉11月～3月の毎月各1日ずつ全5回。
〈場　所〉高知県立文学館1階（文学館ホール）
〈定　員〉50名。全5回なるべく欠席せずご参加下さい。
〈テーマ〉各回のテーマ、講師の詳細は10月上旬発表。
〈募　集〉10月上旬要項発表、受付開始。詳細はお問い合わせ下さい。

高知県立文学館ニュース　第六号　平成十一年十月一日発行　〒七八〇―〇八五〇　高知市丸ノ内一丁目一番二〇号　電話〇八八―八二二―〇二三二　FAX〇八八―八七一―七八五七

高知県立文学館カレンダー

1999年

10～12月

10月――October	11月――November	12月――December

常設展示

江戸川乱歩

海野十三

「江戸川乱歩自筆書簡と海野十三写真」＜森下雨村コーナーに新収資料＞

昭和３年「新青年」に発表した「電気風呂の怪死事件」で探偵文壇にデビュー、日本ＳＦ作家の父とも呼ばれた徳島市出身ＳＦ作家・海野十三が戦後の失意のなかで昭和24年に病死した直後に、その遺影を添えて森下雨村に宛てた乱歩の自筆書簡を追加展示しました。

催しもの

第２回児童生徒朗読コンクール

◇最終審査
　11月7日（日）
◇会場
　文学館ホール
◇第一次審査で選出された児童生徒の公開審査及び表彰式・記念講演会。

◇記念講演会
「子どもと本のおいしい関係」
　日本文芸家協会会員
　　山下明生氏

壺井　栄（1899.8.5～1967.6.23）
香川県小豆島出身。同郷の壺井繁治に誘われて上京、結婚。近くに住んだ林芙美子や平林たい子らの影響もあり佐多稲子の勧めで「大根の葉」でデビュー。「二十四の瞳」は1952年に発表し、1954年に映画化、好評を博した。

生誕100年作家　記念映画会

今年生誕100年を迎えた作家作品の中から、川端康成原作「伊豆の踊り子」（昭和8年、五所平之助監督、田中絹代主演）と、壺井栄原作「二十四の瞳」（昭和29年、木下恵介監督、高峰秀子主演）を上映します。
◇11月17日（水）
　12月12日（日）
◇両日とも、
　10時～「伊豆の踊り子」
　13時30分～「二十四の瞳」
◇各回の定員100名。入場無料。当日、上映の30分前より５分前まで受付。上映開始後の入場はご遠慮ください。

川端康成（1899.6.14～1972.4.16）
大阪府出身。「伊豆の踊り子」「浅草紅団」「雪国」などの名作で知られ、1968年には日本人として初のノーベル文学賞を受賞。「伊豆の踊り子」は1926年に発表した作者の体験にもとづく青春小説。

特別企画展

〔没後50年　田中英光展 ―純粋な魂の軌跡―〕
10月９日（土）～11月28日（日）

【関連催し物】※いずれも参加無料・文学館ホールにて

映　画　会
※当日先着100名
◆10月17日（日）14時～
　11月14日（日）10時～
◆「斜陽」（'93松竹）
原作・太宰治／監督・河野宏
出演・紺野美沙子、司葉子、根津甚八

記念講演会
※（はがき10月25日必着でお申し込みください）
◆11月3日（水・祝）
　13時30分～16時30分予定
◆講師／島田昭男氏（恵泉女学園大学教授）

〔岡本弥太　生誕100年記念展〕
12月18日（土）～２月13日（日）

【関連催し物】
記念講演会
※要事前申し込み（はがき）
◆１月23日（日）午後予定
◆講師／嶋岡晨氏（詩人）

【休館日】10月――４，12，18，25日　　11月――１，８，15，22，29日　　12月――６，13，20，26～31日

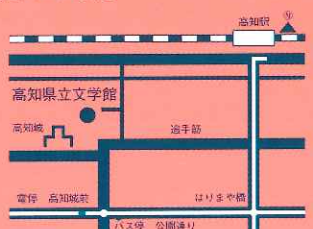
冬の特別展予告
岡本弥太
生誕100年記念展
12月18日（土）～2月13日（日）

土佐近代詩の確立者・岡本弥太。生涯ほとんど郷里の土佐を離れず、中央詩壇で華々しく活躍することもありませんでしたが、「南海の宮沢賢治」「青き霰の高士」などと称され、その作品を知る人々の中では、今なお深い印象を留める詩人です。彼の生涯とその置かれていた状況、作品で目指したものを振り返りながら、詩と詩人たちの未来を探ります。

利用案内

開館時間	午前９時～午後５時（入館は、午後４時30分まで）
休館日	毎週月曜日（休日・祝日の場合はその翌日） 年末年始（12月26日～１月１日）
観覧料	一般300円 特別企画展のあるときは、料金が変わります。 20人以上の団体は２割引。高校生以下、高知県長寿手帳所持者及び身体障害者手帳（１・２級）療育手帳、障害者手帳所持者等とその介護者１名は無料です。
駐車場	なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
貸出施設	企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



●高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
●ＪＲ高知駅下車徒歩20分
●土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩4分
●バス停公園通り下車北へ徒歩4分

高知県立
文学館
高知市丸ノ内1丁目1－20
電話　088・822・0231
FAX　088・871・7857
〒780-0850